二人のオリンピアン　福原吉春　気田義也

～半世紀前の同時期にオリンピック出場を果たした福原と気田
蘭越町出身の二人のアルペンスキーレーサーの足跡を追う～

今野順哉

福原吉春

気田義也

二人のオリンピアン　福原吉春　気田義也＊目次

まえがき・・・４
第一章　二人のおいたち・・・７
第二章　高校スキー部時代・・・１６
第三章　スキー名門大学へ～そしてオリンピックへ～・・・２１
第四章　プロスキーヤーと銀行マン・・・２７
第五章　二人の滑り～剛の福原　柔の気田～・・・３０
第六章　雑考～二人の足跡を追ってみて～・・・３４
あとがき・・・４２

まえがき

昭和３０年代前半、日本のアルペンスキー界は一人の天才スキーヤーの出現に色めきだった。日本スキー黎明期のスキー研究家として名高い猪谷六合雄（いがやくにお）より、幼少期からスキーの英才教育を受けた息子・千春は、欧米での豊富なスキー経験に裏付けされた確かなテクニックで、昭和３１年（１９５６年）コルティナ・ダンペッツォ（イタリア）で開催された冬期オリンピックのアルペンスキー競技・回転種目で日本人初の銀メダルを獲得した。２年後のバドガシュタイン（オーストリア）世界選手権でもこの種目で銅メダルを獲得し、世界のアルペンスキー界に"CHIHARU IGAYA"の名を強烈にアピールした。その後半世紀を経た現在に至ってもオリンピック、世界選手権のメダル獲得の記録は破られていない。

その数年後の昭和３０年代後半から昭和４０年代前半にかけて、引退した猪谷に代わりオリンピック日本代表の座を勝ち取った選手の中に、北海道・蘭越町出身の福原吉春（ふくはらよしはる）と気田義也（きだよしなり）の名前を見つけることができる。二人が育

った蘭越町は、札幌の南西約１００キロメートルに位置する人口5千人余りの農業の町である。東側に隣接するニセコ町と倶知安町は、世界に名だたるパウダースノーと、ニセコアンヌプリの広大なゲレンデを武器に、世界各国からスキーヤー・スノーボーダーが大挙して押し寄せる巨大なスノーリゾートを展開しているが、二人が練習に明け暮れた昭和３０年代はというと、やっと比羅夫スキー場（現在のグランヒラフスキー場）にこの地域で初のリフトが登場したに過ぎない。

蘭越町で育った二人は、中学生までは自宅近くのリフトの無いスロープを、高校時代は倶知安旭ヶ丘のスロープをひたすら脚で登っては滑るを繰り返して技を磨き、全日本選手権を制し、オリンピックへの切符を手に入れた。蘭越育ちの同年代の二人が、札幌、小樽、旭川、さらには長野県、新潟県勢などのアルペン列強の選手達を尻目に、いかに日本代表の座を勝ち取ったのであろうか。二人の足跡を追うことによって明らかにされる事実は、スキーや蘭越町に縁がない人であっても興味深いことであろう。さて、二人がスキーに熱中した昭和３０年代の練習環境はどんな状態だったのだろうか。山のスケールや雪の量、質は６０年の月日を遡っても大差はないだろう。しかし、ゴンドラや高速リフトの増設、ゲレンデの拡張及び圧雪車の導入で、広大なゲレンデを縦横無尽に滑ることができる今と比べ、その練習環境ははるかに貧弱であり非効率的であったと想像できる。さらに至近と

は言えない蘭越から倶知安旭ヶ丘スキー場への移動距離、移動時間も考慮に入れると、二人の練習環境が恵まれていたとは言い難い。二度のオリンピックに出場した二人は、残念ながら猪谷のような輝かしいリザルトを残すことはできなかった。しかし、奇しくも同時代に蘭越の田舎町から果敢に世界に挑んだ二人は、日本のアルペンスキー界の歴史に確固たる足跡を残した。すでに故人となられている二人に代わり家族、親類及び友人の証言と残された記録を基に、二人が残した大いなる野望の足跡を追ってみたいと思う。

第一章

二人のおいたち

福原の幼少期

福原吉春は昭和１７年（１９４２年）２月１０日、蘭越町字昆布で鉄工所を営む福原家７人兄弟の６番目として生まれる。小学校入学前からスキーを始め、昆布小学校３年時にはすでにアルペンレースに出場していたという。出るレース出るレースで常に１位という天才スキー少年ぶりを発揮した。生家のすぐ近くに大林寺というお寺があり、その横にスキー用のスロープがあった。幼少の頃の福原の冬の遊びといえばもっぱら大林寺スロープでのスキーであった。全長４００メートルの沢沿いのスロープは最大斜度４０度の急斜面で、下部にはジャンプ台があった。時にはポールを立ててスラロームに興じ、時にはジャンプ台で颯爽と飛躍に興じるうちに、天性のスキーセンスに益々磨きがかかった。スキー用スロープとはいってもリフトがあったわけではなく、ひたすら脚で登るスキーは足腰を強靭に鍛えた。

福原にとってラッキーだったのは、この昆布という地域がことさらスキー競技熱の高い土地柄であったということだ。現在、人口５百人に満たない集落の昆布は、当時の人口でも今の倍の約１千人に過ぎなかったのであるが、昭和７年にはすでに昆布スキークラブな

るものが結成されており、数々のスキー大会の実施やスキー選手の育成を熱心に行ってきた。福原の生家の隣には昭和２０年代後半に全日本や道内の大会で活躍し、後に北海道スキー連盟やニセコスキー連盟の重職を歴任し、北海道のアルペンスキー界発展に大いに貢献した増原亀市がいた。増原は福原の幼少期について次のように回想している。「私がオリンピック候補に選ばれた昭和２７年頃、福原君は小学生で、体格は小さかったが足腰の強靭さは抜群でした。とにかくイチかバチか度胸のある迫力に満ちたスキーをやることを教えるために、スパルタ式の猛練習をやりました。スラロームの練習で私と5秒以内に縮まると羊かん一本の賞品つきで、街に電燈が灯っても勝つまでは絶対に自分からやめるとは言わなかったですね。不撓不屈の精神というか少年ながらアッパレでした」（スキージャーナルより抜粋）また種目は違うが同様に全日本で活躍した距離競技の大柳政雄、複合競技の藤田三郎・武四郎兄弟が大林寺スロープで幼少期の福原にスキーの『滑る、走る、飛ぶ』を手ほどきした。大柳の回想「とにかく、ことスキーに関しては、彼はディスタンス、ジャンプ、回転、滑降と小学時代からなんでもやりましたね。中学時代は滑降と回転で伸びた。年齢に達しない頃から少年組に出場させて選手生活の心構えを会得させるようにしました。吹雪の中でも夕暮れまで練習、歩くときも試合の気持ちで心身を鍛えることを強調した」（スキージャーナルより抜粋）この頃の様子について福原は「良い指導者に恵まれて幸運でした。小さい時分から『うまいぞ！うまいぞ！』とほめられて、よし、やってやろ

うと思いました。全日本で優勝するような選手と滑りたい一心でついていった。今考えてもあの頃の練習量が一番すごかったですね。練習が終わった後で食べさせてくれたソバが実にうまかった」（スキージャーナルより抜粋）と回想している。さらに同じ並びには3歳年下で蘭越高校から日本大学へと進み、全日本選手権やキロメーターランセで活躍した楠村喜一がおり、お互い切磋琢磨でスキーの技を磨いたのであろう。このような人口希薄な地域で、しかもリフト施設もない貧弱なスキー環境であるにもかかわらず、全日本クラスの選手が周りにごろごろいたのには驚かされる。

中学生の頃と思われる福原（左）

幼少期の福原が練習に明け暮れた大林寺スロープ跡。現在は閉鎖されその名残りはない

気田の幼少期

一方、福原の1歳下で学年ではふたつ下の気田義也は昭和18年（1943年）9月29日、機関車のボイラーなどの製造を営む気田家7人兄弟の長男として、東京都亀戸に生まれた。戦禍で家業の継続が困難になり、小学生の頃に両親の故郷である青森県五戸へ引っ越し、さらに縁あって北海道蘭越へ移住した。通い始めた蘭越中学校には隣接して向山スロープがあり、教員の中にスキー指導に熱心な逢見幸一がいた。気田は最初ジャンプに興じたが、逢見は気田の才能をいちはやく見出し2年時にアルペン競技への転向を勧めた。当時の様子を5歳下の弟・義三は「先生は冬になると日曜日には朝から晩までつきっきりで指導してくれました。兄にはそれに応える強い気持ちと創意工夫の才があったのでしょうね。両親も一生懸命応援しましたし、まち全体が、スキーに打ち込む子どもたちを支えていました。たとえ小さなまちでも、スキーによって全国や世界につながることができる。それをみんなが感じていたと思います」（ニセコパウダーヒストリーより抜粋）と語っている。ご多分に漏れずこの向山スロープにもリフトは無く、ひたすら脚で登っては滑る練習環境は昆布の福原と同様であった。この向山スロープでは国体や道内の大会で活躍した木下兄弟などと練習に明け暮れたが、時には練習環境の変化を求めて、近隣の山に練習に適

当なスロープを見つけてはポールをセットし、スラロームの練習を繰り返したという。身体に恵まれなかった気田は、しかし類稀な運動センスの持ち主であった。冷静沈着な性格も手伝い、小さい体をカバーする技術を確実に身に着けていった。福原と共通して言えることは、無類の練習の虫であったということ。生まれながらの運動センスの良さは豊富な練習量によってさらに磨き上げられていった。

二人の幼少期において特筆すべきは、スキーの練習は全て脚で登って行われていたということ。リフトで短時間にしかも労力をかけずにスタート地点に立て、滑ることだけに集中できる現代のスキー環境と比べると、それは恐ろしく非合理的で非効率的なスキーであったといえる。なぜなら登攀は一見筋力を鍛える上で合理的な練習のようでもあるが、瞬発力を駆使するスキーに対し持久力を鍛える登攀は、運動の質が異なり鍛えられる筋肉もまた異なる。ゆえに登攀がスキーのタイム短縮に役立ったとは言い難い。さらにリフトの数倍時間を要し、疲労が伴う登攀の練習効率の悪さはいうまでもない。如何せんリフトの無いこの時代、脚で登るより仕様がなく登りの方法に選択肢は存在しなかった。単純に誰よりも早く登れる者は誰よりも数多く滑れるわけであり、練習の虫であった二人は他人よりもはるかに速いスピードで登攀を繰り返した。この地域に初めてリフトが登場したのは昭和３６年のことで、福原はすでに高校卒業の時期を迎えていた。

気田の幼少期の練習場、向山スロープ

第二章

高校スキー部時代

福原の高校時代

地元の桂中学校を卒業した福原は倶知安町にある倶知安農業高校へ進学した。一にも二にもなくスキー部へ入部。練習環境は大林寺スロープから倶知安旭ヶ丘スキー場に移った。当時、旭ヶ丘スキー場にはロープトウがあったが、スキー部の練習に使われることはなかった。ここでも登りはもっぱら脚による登攀であった。福原が初めて全道大会のリザルトの上位に登場したのが昭和３４年（１９５９年）、高校２年時の全道高校選手権大会で、回転３位、大回転６位の成績を残している。この年全国高校選手権大会にも駒を進めた福原は、大回転で５位入賞し全国デビューを果たした。初めて出る全国大会でも好成績を残し、彼のパフォーマンスがすでに全国で通用するレベルにあることを証明した。翌年３年時に小樽天狗山で開催された全国高校では回転で２位、大回転３位とタイトル奪取にもう一歩のところまで迫った。

気田の高校時代

一方、気田は同じ倶知安町にある倶知安高校へ進んだ。蘭越から倶知安へ通学する汽車に、次の駅の昆布から2年上の福原が乗り込んできた。当時、倶知安高校スキー部と倶知安農業高校スキー部は旭ヶ丘スキー場で合同練習をしていた。授業が終わってから日没までの数時間が練習時間に充てられた。倶知安高校スキー部１２～１３名、農校スキー部７～８名、総員約２０名の高校スキー部員が旭ヶ丘のスロープに、バールと呼ばれる鉄の棒で雪面に穴を開け、竹のポールを挿してセットしたコースをひたすら脚で登り、回転、時には大回転の練習が繰り返された。今でこそスキー強豪校には名コーチがいて、ポールセットから技術の指導までをフォローし、選手は滑ることのみに集中できる環境が当たり前になっているが、当時の倶知安高校及び倶知安農高スキー部にはコーチは不在で、全て選手の自主性に任されていた。いきおい上級生が下級生を指導するという関係が常態化し選手間の結束も強化されていった。当時の両校のスキー部には全国大会や全道大会で活躍した沢村昭博（全国高校・大回転優勝）、斉藤修（全道選手権・大回転優勝）、坂東弘（国体・大回転５位）、中谷紀治（全道高校・回転優勝）、木下義信（全道選手権・滑降優勝）などの錚々たるメンバーがいたが、なかでも福原、気田の実力は突出していた。

気田はアルペンに転向して３シーズン目の高校１年時に、札幌円山で行われた全道高校の回転、大回転の両種目で６位入賞を果たし、大器の片鱗をうかがわせた。さらに気田が大ブレークしたのは翌年２年時のこと。２月に秋田県花輪で行われた全国高校の回転でタイトル奪取すると、気を良くして臨んだ３月の全日本・大回転（長野県志賀高原）で、なんとこの若武者は並みいる成年組の強豪を抑えて優勝してしまったのだ。さらに驚きはこの時の気田のスタート順は７０番。通常、選手が滑る毎にコースが荒れるアルペンレースでは、ゼッケン７０番の勝利はありえないといっても過言ではない。ほとんどの有力選手が滑り終わり、順位が決まりかけていたところだけに、この快挙は周囲を驚かせると共に気田の名前を一気に全国区へと押し上げた。当時の状況について気田は「あの時は前日の回転で目標の１０位になれたんで、大回転はいいやーと気楽だったんです。それに寒くてアイスバーンの状態がレース開始時とあまり変わらず、思い切ってとばせた。２、３日してから実感がわいてきて・・・。うれしかったです」（北海道新聞より抜粋）と語った。気田が志賀高原の寒冷な気候と雪質を全日本タイトル奪取の味方にしたのは言うまでもない。さらに波に乗る気田は翌年３年時には、北海道のタイトルを総なめにし、全国高校の回転では２連覇を達成、国体少年組も制し、その勢いは止まるところを知らなかった。

高校時代　二人が練習した現在の倶知安旭ヶ丘スキー場

第三章

スキー名門大学へ　～　そしてオリンピックへ　～

福原は明治大学、気田は早稲田大学へ

高校時代に全国のタイトルにもう一歩のところで見放された福原は、それでも数々の大会での成績が評価されスキーの名門・明治大学へ進学した。福原の快進撃は大学に入ってからさらに拍車がかかった。大学2年時にはシャモニー（フランス）世界選手権大会の代表に選考され初めて海外でのレースを経験する。回転の17位という記録は日本人の出場選手5名のうち最高位であった。続いてビラール（スイス）で行われたユニバーシアード大会では回転で4位に入っている。大学3年時には全日本の滑降、回転の2冠を制し、さらに翌年のインカレ・回転も制し、その年の第9回冬季オリンピックインスブルック（オーストリア）大会への出場を決めたのであった。一方、早熟の気田は明大、日大と並ぶ大学スキー界の雄・早稲田大学へ進学した。破竹の勢いの気田は、前回のスクォーバレー（アメリカ）五輪代表の見谷昌禧などの先輩の指導により、理論的にも成長し、敏捷なスキー操作をさらに磨いたという。大学一年時に国体を制し、福原同様翌年のインスブルック五輪への出場を決めた。かくして同郷のアベックオリンピアンが誕生したのである。福原大学4年時、気田大学2年時のことである。

インスブルックオリンピックへ

インスブルックでの成績は福原が回転、大回転において２０位代、気田は３０位代と猪谷の偉業には及ばなかったが、福原の回転２３位は日本人出場５選手中最高位であった。福原はインスブルック直前のゴールデック（オーストリア）の国際スキー連盟(FIS)公認レースの回転で優勝している。ワールドカップがまだなかったこの時代に、FIS 公認レースで勝利したのは猪谷以来のことで、世界への手ごたえを感じていた。もしやメダルもと意気込んで挑んだインスブルックであった。

帰国した気田は翌年の全日本で回転を制すると、翌年２連覇を達成。その年のインカレ回転も制し、回転の気田の名を不動のものとした。

インスブルック五輪でのアルペンスキー日本代表選手の成績

選手名	滑降		回転		大回転	
富井　一	33	2:30.02	31	1:45.09	22	1:56.65
福原吉春	45	2:35.55	23	1:40.71	25	1:58.35
野戸　恒男	46	2:34.76			35	2:01.26
大平　義博	57	2:40.82	38	1:57.87		
気田　義也			34	1:49.11	38	2:04.22

福原の強気

福原はアマチュア現役時代に３０回の海外遠征を経験したという。気田のそれは記録が残っていないので定かではないが、２度のオリンピック、世界選手権出場など当時の選手としては豊かな海外経験者だったといえる。福原は初めての海外遠征であったシャモニー世界選手権、ビラールユニバーシアード大会の帰国後に、メダルを逃したことに大変悔しがるコメントを残している。初めての国際大会、しかもアルペンの本場ヨーロッパに乗り込んでの状況で、福原はすでに世界と伍して勝利を意識していたのである。本場ヨーロッパからはるかに離れた極東の島国に生まれ育ち、本場のスキーを見たこともなかった選手が、である。この時、福原はスタートリストに連なる選手の名前は誰ひとり知らなかったという。全くのアウェー、言葉が通じる日本人といえば一緒に選ばれた日本代表選手とコーチのみ。固い雪質と圧倒的なスピードの違いに度肝を抜かれたという。並みの心臓では意気消沈必至の状況であるのに、この強気の自信はどうだろうか。その理由として私は、数年前まで世界と互角に戦った猪谷千春の存在が大きいのではと想像する。同じ日本人として勝算なきにしもあらずと強気で臨んだに違いない。

大学卒業、そして二度目のオリンピックへ

大学を卒業した二人は次のグルノーブルオリンピックを目標に、福原はスポーツウゼアメーカー・ゴールドウィンへ、気田は北海道拓殖銀行へそれぞれ就職する。社会人となっても二人の快進撃は止まるところを知らない。福原は昭和４１年、自身２回目の全日本２冠（滑降、大回転）を達成。その大会のもう一種目・回転は気田が制した。そして二人は２度目のオリンピックへの切符をつかむことになる。代表決定時の福原についてスキージャーナルは次のようなコメントを寄せている『「ぜひ６位入賞を果たしたい」メガネの奥で目が鋭く光る。絶望的な日本アルペン陣のなかにあってこの一言は心強い。テクニックはもちろん、闘志、気魄、根性でこの人の右に出る人はいない。アルペンチームのユニフォームの相談に至るまで、チームの軸として自分の立場を彼は良く知っている』（スキージャーナルより抜粋）一方、気田については『この人を見てギリシャの彫刻のようだと言った人がいる。鋭い刃物を思わせるデリケートな感覚。試合のカン、根性、勝負に対する執念はすさまじい。運動神経は抜群で、特に鉄棒の大車輪は得意としている。彼が北海道生まれでなかったら体操の選手にしたかったという人もいる。昨年の不調から完全に脱皮したとみられ、アルペンチームの主力として活躍が望まれている。「最後のオリンピックです。

まず自分が勝つことが日本を強くする第一歩です。勝つために全力を尽くすつもりです』（スキージャーナルより抜粋）とコメントしている。気田の性格について弟の義三は「温厚にして冷静、レースに勝っても威張ることは一切なかった。礼儀正しく、負けず嫌い」と語った。

意気込んで臨んだグルノーブル。しかし成績は福原が滑降、大回転で５０位代。得意の回転では福原、気田共に失格という結果に終わった。

グルノーブルオリンピック代表決定時の福原（上）と気田（下）（写真提供スキージャーナル）

グルノーブル五輪でのアルペンスキー日本代表選手の成績

選手	滑降		回転		大回転	
野戸　恒男	45	2:10.22		失格	40	3:46.65
福原　吉春	54	2:14.09		失格	50	3:51.47
丸山　仁也	59	2:18.04				
丸山　寿一	64	2:19.33				
佐々木富雄				失格		
気田　義也				失格		

第四章

プロスキーヤーと銀行マン

引退、そして新たな道へ

さて、インスブルック、グルノーブルと二度のオリンピックに出場した二人。ゴールドウィンに就職しレースを続けていた福原は、グルノーブルの敗北を機に会社を退職し、プロスキーヤーの道を選択する。プロスキーヤーといっても彼が目指したのはレッスンプロではなく賞金稼ぎのプロレースの世界だ。当時のプロレースは欧米をメインに、かつてアマの世界で活躍していた選手がしのぎを削っていた。国際経験のない選手には勝ち目はなく、それまで日本人は出場したことがなかった。福原は日本人プロレーサーの第1号であった。この異例の転身にライバル気田は「彼はスキーをやるために生まれてきたような男。アマ、プロにかかわりなく彼の存在は日本のスキー界にとってプラスになる、いやプラスになるようなことが彼ならばできる」（スキージャーナルより抜粋）とコメントしている。一方、気田が就職した北海道拓殖銀行のスキー部には道内の強豪選手が在籍し、スキー競技を続けていける環境にあった。しかし気田もまた、グルノーブルの敗北が引き金になったのであろうか、翌年、翌々年の北海道選手権は制したものの、その後メジャーなレースのリザルトに彼の名前が載ることはなかった。スキー選手を引退した気田は、その後一切スキーを履くことはなかったという。本業である銀行マンとして各地を飛び回る生活が待

っていた。明日をも知れないプロレースの世界に飛び込んだ福原、一方堅実な銀行マンに転身した気田、全く別々の道を歩みだした二人のオリンピアン。共通して言えることは『彼らに遊びのスキーは存在しなかった』ということではないだろうか。残念ながら若くして他界されてしまった二人に、その真意を問いただすことはかなわない。プロとしてとことんスキー道を極めるか、けじめをつけてきっぱりやめてしまうかの究極の選択をした二人であった。

プロレースに出場する福原

北海道拓殖銀行スキー部時代の気田（共に写真提供スキージャーナル）

第五章

二人の滑り～剛の福原、柔の気田～

二人の滑りを実際に見たわけではないが、スキージャーナルに掲載された数枚の連続写真を見る限り、剛の福原、柔の気田という印象を受ける。グルノーブル五輪決定時の福原は身長１５８センチメートル、体重６３キログラム、一方気田は１５８センチメートル、５３キログラムで身長は同じだが体重に１０キログラムの差がある。写真から見て取れる全身像も筋肉質でがっちりした福原に対し気田のそれはスリムで繊細なイメージである。実際の福原を知っている甥の政幸は「まるでボディビルダーのような身体」と評した。それにしても小兵である。世界と伍して戦うにはあまりにも小さい。銀メダルの猪谷以降、世界の頂点に限りなく近づいたスラローマー、岡部哲也、木村公宣、佐々木明はいずれも身長１８０センチメートルオーバーで、世界水準にひけをとらなかった。当世のトップスラローマーで小柄といわれる湯浅直樹でも１７７センチメートルである。福原はいかにもパワフルである。全身の筋肉を総動員させ少しでも早く滑ろうという気魄が感じられる。一方、気田は技巧派で、無駄な力は使わない巧みさが感じ取れる。同じ環境で育った二人であっても、体が小さいハンディを福原は徹底的な筋力アップで、気田は無駄を省いた洗練された滑りでと、まったく逆のやり方で克服していったのは興味深い。

回転競技での福原（右）と気田（左）の連続写真（写真提供スキージャーナル）

大回転競技での福原（右）と気田（左）の連続写真（写真提供スキージャーナル）

第六章

雑考～二人の足跡を追ってみて～

木々におおわれた蘭越町湯里の私の自宅から車でほんの５分のところに昆布の集落があります。JR昆布駅の横には町営の温泉施設があって、その利用客の車の出入りを除けばひっそりと静かな佇まいです。残念ながら６０年前のこの地に、誰よりも熱くスキーに熱中した福原少年がいたという形跡は見られません。大林寺のスロープは閉鎖され草木が茂りその名残りすらありません。福原少年に熱くスキーの手ほどきをした諸先輩たちも天寿を全うされ、彼の幼少期を知る人も多くはありません。一方、蘭越中学校の横には気田少年のスキーの基礎を育んだ向山スロープが現存します。そして二人の高校時代の練習場・倶知安旭ヶ丘スキー場は町営スキー場として今も営業しています。

３年前に蘭越町湯里に住みつきました。そもそもは是が非でも蘭越に住みたかったというわけではなかったのです。根っからのスキー好きの私は、常々スキーができるより良い環境を探していたのですが、行きついた所が世界一のパウダースノーと広大なゲレンデを有するニセコでした。ニセコ界隈で家を探した末、たまたま安く売りに出ていたのが蘭越町湯里だったというだけのことです。でも３年住んでみて蘭越の良さをじわじわ感じてい

ます。スキーの指導を生業とする私、自宅から職場のニセコアンヌプリスキー場までは車で１０分の距離です。リビングの大窓からは左右対称で富士山を彷彿させる羊蹄山が望めます。ニセコの冬は世界一のパウダースノーを目当てに大挙してやってくる外国人スキーヤー、スノーボーダーで大賑わいです。まだまだ蘭越人駆け出しの私が蘭越のことを語るのはおこがましいのですが、蘭越とスキーの関わりの歴史の中に大変興味深い『できごと』を発見できたことは幸運でした。

福原の１７年後、気田の１８年後に北斗市（旧大野町）に生まれた私は、父親の転勤で間もなく道東の根室へ引っ越します。スキー場の無い根室の冬の遊びはスケートとそり遊びでした。小学６年時に再び父親の転勤で登別に移りました。登別温泉の奥のカルルス温泉にスキー場があり、初めてリフトというものに乗りゲレンデを滑降しました。その時の感動、興奮は今も忘れません。何せ、それまでの遊びは平坦なスケートリンクをぐるぐる回るだけの変化の乏しいものだったのですから。一気にスキーのとりこになった私のスキー場通いが始まります。しかし、当時私の住まいがあった登別市幌別からカルルス温泉スキー場までは、バスで1時間の道のりです。学校がある平日のカルルス通いは不可能で、冬休みと土・日に限られました。私にとってラッキーだったのは、通った中学校にスキー

指導に熱心な先生がいらっしゃり、乗用車でスキー場往復の送迎をしてもらえたことでした。中学2年時に札幌で冬季オリンピックが開催され、ブラウン管に映し出される世界のトップレーサーの滑りに釘づけとなりました。折しも、先生の勧めもあってアルペンレースの真似事を始めたばかりの頃で、これを機に私のスキー熱は加速度的に上昇しました。その年の春にニセコチセヌプリで大回転の大会があるというので出ることにしました。私にとって初めてのニセコ遠征です。近場の小規模なスキー場しか行ったことのない私にとって、ニセコの山々はとてつもなく巨大に見えました。

2度のオリンピックに出場した二人。驚きだったのは高校まではひたすら脚で登って滑っていたということ。スキー場にはリフトがあり、スキーはリフトで登って滑ることが当たり前の時代に育った世代にとって、脚で登って滑ることの大変さはなかなか実感できないことです。それでも高校、大学とアルペンレーサーのはしくれだった私は、夏場のトレーニングに雪渓へ行き、脚で登っては滑ることのしんどさを何度か体験しました。せっかく大変な思いをして登ったスロープ、失敗しないように思わず慎重に滑っていたというような記憶があります。脚で登っては滑ることが当たり前だった二人の世代。しかし、大会は普段の練習バーンよりははるかに長く、変化の多いものだったでしょう。脚で登って滑

れる距離はたかが知れたものです。福原が幼少期に練習に明け暮れた大林寺スロープが４００メートル、気田の向山スロープはそれよりさらに短く、また二人の高校時代の旭ヶ丘も全長３００メートルくらいのものです。彼らはその短いバーンに創意工夫で大会バーンを想定し、何度も何度も反復練習を繰り返したのでしょう。倶知安の町はずれにある旭ヶ丘はその名の通り『丘』と呼ぶにふさわしいスロープです。背後に聳えるニセコアンヌプリと比較すると、それはあまりにも小さく、短い。大回転のセットだと１０旗門ほどしか立ちません。それは本番の５分の１程度に過ぎない短さです。

ニセコの隣町蘭越で育った二人。さぞニセコアンヌプリの広大なゲレンデを縦横無尽に滑っていたのでは、という予想は見事に外れてしまいました。彼らは遠方もしくは背後に聳えるニセコアンヌプリを仰ぎ見ながら、それとは比較にならなく小さなスロープを脚で登りひたすら反復練習に打ち込んでいたというのです。このような環境の中からオリンピアンが二人も生まれたという事実は、なんとも信じがたいことであります。スキーの名門大学に進んで、二人の成績は飛躍的に伸びたといいます。反復練習で培った基本技術が、リフトを使った大学のトレーニングで開花したのでは、とは私の勝手な想像ですが。ワー

ルドカップ８６勝の世界最強のアルペンレーサー、スウェーデンのインゲマル・ステンマルクも少年時代は極々小さなスキー場でひたすら反復練習に励んだといいます。

私が所属するニセコアンヌプリスキースクールには、福原の甥っ子にあたる政幸氏がいます。福原の兄・政直氏の長男で、稼業の鉄工所を継ぐ傍らスキー指導を３０年続けています。大きな体そのままの豪快さと、それとは相反する繊細さを合わせ持つ彼は、その滑りも性格同様ダイナミックにして優雅であり、スキーの天才福原吉春の血筋を感じずにはいられません。また、私が今シーズンより移籍する蘭越スキー連盟には気田の弟・義三氏がいます。末弟の義夫氏と伴にアルペン競技に熱中し、蘭越町のジュニア強化にも尽力されてきました。福原の兄・政直氏、甥っ子の政幸氏、気田の弟・義三氏、そして福原の高校スキー部時代の２年後輩で倶知安在住の坂東氏からは、二人にまつわる貴重なお話を聞かせてもらいました。この紙面を借りて御礼申し上げます。

二人が活躍した半世紀前には人口１万人を超えていた蘭越町。それでも田舎町であったのは変わりありません。リフト設置のスキー場はなく、数百メートルのスロープをひたすら脚で登っては滑るを繰り返し、高校の通学には１時間を要した二人のスキー環境は果たして恵まれたいたのでしょうか。二人の時代から約２０年を経た私が育ったスキー環境はというと（二人の足元にも及ばないへなちょこレーサーだった私と比較してもどうかとは思うのですが）、お世辞にも恵まれていたとは言えないお粗末なものでした。私の育った登別は、北海道にしては温暖なところで雪も少なくスキーはあまり盛んとは言えません。スキー場までも遠く、授業のある平日にスキーはできませんでした。冬休みと土日の練習だけでは、北海道の列強レーサー連中には全く歯が立ちません。聞けば札幌、小樽、旭川などの列強は、平日も授業が終わってからナイターでスキーに乗るというのです。この練習量の差はとてつもなく大きく、それは絶望的なタイム差となって現れました。毎日リフトを使って滑れる環境はうらやましい限りでした。そして現在、スキー強豪校は海外の合宿が当たり前です。リフトが無く脚で登って滑ることが当たり前であった時代、二人の幼少期には自宅の極至近にスロープがあったといいます。そして熱心な指導者の存在。高校時代には毎日練習ができる環境と良きライバルがいました。当時の時代背景を考慮し、他の地域の選手と比較してみると、案外恵まれた環境だったのかも知れません。一度ならず二度ものオリンピック出場を果たした二人。その理由を考えてみました。まず幼少期にジャ

ンプなどを交えたスキー遊びでバランス感覚を養い、そしてショートコースで徹底的な基本練習を繰り返し、他人よりも早く登ることによる豊富な練習量が天性の運動センスに磨きをかけていったと予想できます。そして忘れてはならないのは、当時の二人の周りの充満していたスキー熱の上昇気運。全日本や全道大会で活躍する先輩、仲間が身近にごろごろしていた環境が、頑張れば全日本に手が届くという確信を与え、そしてさらにその先にある輝かしいものへと夢を膨らますことを可能にさせたのでしょう。この気運の上昇こそが負けず嫌いな二人の大きな原動力になったといえるでしょう。

あとがき

二人が活躍した時代から半世紀が過ぎた現在。景気後退と少子化によってスキー環境も一変しました。地方の小規模スキー場は姿を消し、スキー競技人口も減少の一途です。アルペン競技を継続するには多額の費用がかかります。道具、合宿、レース出場にかかる経費は膨大です。世界を目指そうとするのなら国際スキー連盟（FIS）のポイント獲得が必要不可欠であり、多くのFISレースに出なければなりません。移動、宿泊、大会エントリーにかかる費用だけでも少なくありません。またゲレンデを独占してしまうポール練習は利益優先のスキー場経営者の理解を得られないケースが多く、以前はゲレンデのあちこちに見られたポール練習風景は減少の一途です。レーサーのはしくれだった私の中学・高校時代には、全道各地に選手がいてその数も膨大でした。少子化やスポーツ・遊びの多様化でスキー離れが顕著な今、強豪校に特定の選手が集まる一極集中の傾向は強まるばかりです。さらにアルペンスキーを敬遠する理由のひとつにテクニック修得の難しさがあります。ワールドカップのピステはアイススケートリンクと遜色ない固さだといいます。そこにエッジをグリップさせターンを繰り返すわけですから、そのテクニック、体力たるや

生半可なものでは歯がたちません。しかしながら、お金がかかるから、難しいからとあきらめてしまうのではなく、何とかこの競技の衰退に歯止めをかけたいものです。以前、気田を支えたまちぐるみで応援するような体制の再構築に、そのヒントが隠されているような気がします。

二人が残した偉大なる足跡。半世紀前の蘭越に、誰よりも熱くスキーに情熱を傾け、偉業を達成した大先輩がいたという事実は、この地でスキーをする者をワクワクさせてくれたり、何か誇らしい気分にさせてくれたりします。町で唯一のチセヌプリスキー場は２シーズン前より休止しています。アルペン少年団も部員減少で解散したといいます。外国人で賑わうニセコ、倶知安の隆盛に比べれば凋落が否めない蘭越のスキー状況でありますが、蘭越からスキーの火が消えないように、また二人の偉業を風化させないように末永くスキーを続けていきたいものです。

参考文献

・スキージャーナル（スキージャーナル社）
・ニセコパウダーヒストリー（ひらふスキー場発達史刊行委員会）
・日本スキー年鑑（全日本スキー連盟）
・北海道新聞
・雪跡　ニセコスキー連盟創立４０周年記念誌（ニセコスキー連盟）
・蘭越町史（蘭越町）

筆者・今野順哉（こんのじゅんや）プロフィール

昭和３４年（１９５９年）北海道大野町（現北斗市）にて出生
小学６年時にアルペンスキーを始め、翌年よりアルペンレースに没頭
室蘭栄高校スキー部時代にニセコで合宿を経験する
当時スキー・インカレ１部校の大東文化大学へ進み体育会スキー部へ入部する
大学３年時にインカレ出場
大学卒業後にスキーブーツメーカーに就職するも、スキーの指導者にあこがれ３年で退社
イタリアに渡り国家検定スキー教師の資格を取得
全日本スキー連盟スキー指導員の資格を取得
その後約１０シーズンにわたりイタリア、スイスでスキーガイドを行う
その間オフシーズンはスキー雑誌の編集、執筆を行う
帰国後は札幌国際スキー学校、ニセコヴィレッジスキースクールなどを経て
現在、ニセコアンヌプリスキースクールでスキー指導を行っている
３年前より蘭越町湯里に移住

スポーツ科学修士
イタリア国家検定スキー教師
全日本スキー連盟スキー指導員
日本体育協会スキー指導員
日本体育協会自転車指導員

今野順哉
北海道磯谷郡蘭越町字湯里２１−９
e-mail idea.j@naravan.net

二人のオリンピアン　福原吉春　気田義也

発行　２０１４年１１月１日　初版

著者　今野順哉

出版　らんこし作家デビュー・プロジェクト